

平成 5年 4月15日

発行 青梅市文化財保護指導員連絡協議会

青梅市郷土資料室

(青梅市駒木町 1-684 Tel.0428-23-6859)

藤橋の丸山遺跡

市内藤橋の北東端にあるバス停「峠下」付近一帯では、古代人が使った土器の破片が出るころとして、古くから知られています。台風などの雨後には特に多数が発見されていたので、ここは丸山遺跡と命名されました。そして、丸山遺跡を学術的な立場で発掘すると、藤橋地区はもちろんのこと、青梅における古代人の生活の様子を明らかにすることが出来ると期待されていました。昭和62年夏の宅地開発や道路建設に伴なって、青梅市遺跡調査会によって発掘が行われたのを始めとし、合計4回にわたって調査が行われました。

4回にわたる発掘調査によって、旧石器時代の石器集中部1ヶ所、縄文時代中期の住居跡37軒、古墳時代初期の遺物集中地点1ヶ所、古墳時代末期の住居跡14軒、平安時代の住居跡1軒、時代不明の住居跡2軒が明らかになり、また縄文時代中期を中心とした土坑155基、集石遺構7基、配石遺構2基、単独理甕5基、屋外炉状遺構1基、焼土遺構4基などが発掘されました。

旧石器時代は、今から1万年前より以前の時代を言いますので、旧石器時代の石器群が発見されたと言うことは、藤橋には今から1万年以上も前から、人々が住んでいたことを示しています。遺物は槍の先端部や剥片など約700点で、このことから、当時の人々は狩猟と採集の生活をしていたことがわかりました。

縄文時代の住居跡は、当時の地表面から30～50cm掘り下げて作った、直径4～5mの円形あるいは楕円形をしており、竪穴式住居と呼ばれるものです。柱を建てた4～5本の柱穴跡や炉跡も確認されており、今から約3500年前には大きな集落であったと考えられます。

今から1万年以上も前から現在まで、丸山遺跡一帯に大きな集落が形成されるためには、大きな理由があります。その一つは、北側に冬の厳しい北風を防ぐ七国山をひかえ、日当たりも良いことです。その次に、最近まで水田となっていた南側の平野は、鎌倉時代頃までは大きな沼池であったことです。沼池にはフナやウナギなどの多くの魚類が生息し、またタニシなどの貝類もいたことでしょうから、生きていくための大切な食料となりました。鎌倉時代以降は稲作が盛んに行われるようになり、重要な食料の生産地としての役割を果たしました。

遺跡の発掘は、祖先の生活を身近なものとして、私たちに教えてくれています。

(文責 角田清美)